第9回英語教育を考えるフォーラム in Okinawa

新時代に即した実践を

「第9回英語教育を考えるフォーラム in Okinawa～沖縄の地域性・優位性をいかした英語教育～」（主催・沖縄の英語教育を考える実行委員会、共催・琉球新報社、日本英語検定協会）が3月25日、与那原町の沖縄女子短期大学で開かれた。次期学習指導要領で求められる「アクティブ・ラーニング」の小・中・高校・大学の実践者を県内外から招き、新しい時代に即応した授業実践を考えた。（文中敬称略）

田邉祐司氏

仲村昌康氏

鎌田洋子氏

新川美紀氏

パネル討論

◆登壇者◆
新川美紀氏（浦添市立港川小教諭）
鎌田洋子氏（札幌清田高校教諭）
仲村昌康氏（普天間高校教諭）
田邉祐司氏（専修大学教授）
◆コーディネーター◆
金森強氏（文教大学教授）
下地敏洋氏（琉球大学教授）
◆オブザーバー◆
御園和夫氏（関東学院大学名誉教授）

御園和夫氏

金森強氏

子に考えさせる教師に　新川

協同作業で成功体験を　鎌田

生徒が交流し活気呈す

学修者に授業の主権を

新川　外国語教育で、私は子どもたちが相手の目を見て話を聞き、他者理解ができる子を育てたい。教師はこれまでの授業をふり返って見直すこと。子どもたちが今まで学んで付いている力、これから付けたい力、それを今後どうしていくか目指す着地点を決める。子どもにも自分をみつめさせ、そこから次の学びが深まっていく。教師は子どもと一緒に授業を作っていく。

実践例を紹介。単元学習を終えた所で「このチェスが授業として行われている所はどこでしょう」とクイズを出す。子どもたちもさっと答えられないものは協力して答えを出そうとする。答えはオーストリア。チェス発祥の地なので教科としてチェスがある。子どもたちはそれを知るとと調べたくなってどんどん調べる。考えなくては出せない答えを教師が考えて、活動の中に盛り込んで、深い学びにしていく。教師の役割は子どもの考えを深める、考えて言わせる、自分事としての学習へとつなげていくこと。

鎌田　アクティブラーニングをさらに深める必要がある。1人でできる活動は家庭学習で行い、授業は仲間がいないとできないことを積極的に行う。大切なのは生徒たちが「この英語の表現を使って○○してみたい」と課題を自分のものにすること、できるようになるまでの過程が仲間と共に協同で成すこと、最後にその学びが深まること。

イントラダクションとプロダクションの例。比較最上級の文法導入を教師が説明するのではなく、グループごとに与えられた形容詞を使ってキットを作り、発表、ビデオ撮りを1時間で行う。決して流ちょうとは言えないが、間違っては言い直して生徒自身の力で新出文法を学び合う。

〈夢に向かって・ビデオ上映〉プロサッカー選手、建築家。英語を道具に使いながら問いについてグループで客観的に考えさせる。多様な考え方を共有し合うこと。生徒は主語をWeからIに変えて個人のスピーチ原稿を書く作業に発展。授業では、インターラクションの中で知識を出し合い、最後は1人に戻ってライティングなどで個人の考えをまとめ、学びを深めていく。生徒は成功体験を積み重ね、自信と自己肯定感を高めて成長する。

仲村　授業中寝る生徒の多いクラス、教師の発問に応答しないクラス。生徒間の交流、教師と生徒のつながりも希薄だった。悩み考えた時、アクティブラーニング型授業を知った。2学期からグループ学級、ペアグループ学習に替え、ルール作りをした。グループは4人、男女混合ペアワークにし、グループの入れ替えも定期的にし、授業の流れは、最初7～10分英語を話す活動を継続し、リアクション、ジェスチャーを入れてじゃんけんプレイなどをした。私のミスに指摘など受け、かなり活気が出た。留意したのは、明確な指示、空き時間（何もしない）を作らない工夫、教えすぎず（見守る）こと。3学期に入ると定着を実感。アクティブラーニング授業導入後は英語を使う機会が圧倒的に増えクラスの雰囲気、人間関係が明るくなった。

田邉　学修者をどうやって自分自身の学習に生かせるか、主権を彼らに与えるか。軸足をしっかり置いてるなと感じた。そのプロセスをできるだけ学修者に与えると授業が変わって来る。

教育学の言葉に自己関与がある。何か授業に使えるなと思ったら拾い上げてビデオを撮ったりして使う。水準が少し高いものを提示すること、さらに理論に根差した実践が重要。しっかりした裏打ちがなくて、自分だけ面白ければいいとどんどん行くと破綻する。教師のしゃべっている時間より学修者の時間が常に多くなること。それを常にイメージしておくと授業は変わる。パフォーマンスだけでやると正しい英語は伝わらない。直訳型の英語は間違いではないがアクティブとは言えない。伝統型プラスバランス、帰納法と演繹法のバランスが大切。

御園　大学の英語教員養成のカリキュラムを変える必要を感じた。特に高校・大学・社会と連携しなければならない。2045年にAIが人間の知能を超えると予測される時代に、英語教育の目的をコミュニケーション行為だけにしてしまうとAIに負けてしまう。

世界には多面的な考え方がある。その背景にある考え方を理解することが若者の将来に益するのでは。だからディベートや英語で自分の考えを述べてみることは有益。一番大切なのは授業の中で、いかに生徒がアクティブになれる時間を作ることに徹すること。最後に英語教員は自分の英語力を常に磨いていくことが大事。

金森　4技能に新しくやり取りという領域が作られた。生徒が考えたことを即興でやり取りできる能力を作るために、どういうアクティブラーニングの授業を作っていくかが宿題だ。将来的にはアクティブラーニングを通して沖縄の生徒がどういう人間に成長したか、検証が必要だ。

基調講演

今、求められている授業改善の意義と背景

田邉氏
（専修大学教授）

多様な学び合いを

児童・生徒に驚き、発見、気付きを起こす、これがアクティブ・ラーニング。一方的な講義形式の学びではなく、学修者が課題の発見、解決に向け主体的・協働的に学ぶ学修手法だ。人の教え方は帰納的、演繹的の2通り。教師による働き掛けが学修者の気付きを起こす。教師が教え込もうとするのではなく、学修者につかませることが大事。働き掛けの切り口は、その先生が英語をどう学んできたかが投影される。生徒の思考喚起をどう仕掛けるか。対照や比較、たくさんの成功体験の蓄積による、学び合いのバリエーションをどれだけ増やせるか、共有できるかだ。

若い先生方は授業にICTをうまく活用している。その先にあるのは教科書のデジタル化。バーチャル英会話を授業に導入する委託実験も行われる。授業のうちの30分をバーチャル映像と英会話する時代がくる。

発見や気付き、達成感を感じたとき、学生は自己高揚感が味わえる。協働作業をコンセプトに音声指導・学習法を導入している。

時々は先生中心の授業であっても、演繹的であっても、文法をしっかりやってもいい。それぞれの結び付きをしっかりと、バランスを考えた授業をしてほしい。

国際理解を育むための方策とは

ディリープ・チャンドララール氏
（沖縄大学副学長）

生徒の視野広める

私たちの学校システムは生徒に知識を吸収することだけに熱を入れ、生徒にその情報に疑問を持つことを教えていない。生徒、学生の知識を広げ、心を豊かにするためには、コスモポリタン的な視野やグローバルな価値観を確立することである。多様な能力ある人材とは①創造的に考える人②問題を解決できる人③効果的にコミュニケーションできる人④協力できる人⑤倫理的で強い意志のある人―である。

大学の教科書は日米関係を過度に取り上げており、異なった形の国際化には触れていない。そのような姿勢は若者がグローバル化社会を生き抜く能力を持てない原因。英語によるコミュニケーション能力は自己評価の高さに比例しており、英語教師にとっては、英語学習者の自信を育てることが大きな課題。英語教育の展望を考える時に、変化する世界では、生徒自身の視野を広めさせる必要が求められ、グローバル化は人々の視野を広め、かつてない程の関わりや考えの共有、影響などをもたらしている。

国境を越えた教職員や学生の交流が異なる社会的、文化的視点はもちろん貴重な学術的専門性を提供し、グローバルな体制やそのネットワーク、人材なくして大学が世界レベルとはなり得ない。私たちは未来の成長に向け過去の経験から学ぶ手段として、反省の重要性を理解する必要がある。究極の成果は自らと世界を同一化することから来る。

実践報告　世界意識し行動する人材を

パネル討論に先立ち、中・高校・大学の教員が新しい時代の実践授業例や、次期学習指導要領等について報告した。

■公開授業「新しい時代に即応した教育実践」田邉祐司氏

「パラ言語学」（ことばによらないコミュニケーション学）の視点から英語コミュニケーション能力の伸長につながる英語音読のあり方を再考。中高の英語音読の問題点として形式的・機械的で意味が伝わらないことを挙げ、声にも表情があり、学生に自身の音読を録音させ振り返えらせるなど働き掛けている。

■実践発表「英語教育改革の最前線」高野敬三氏（明海大学副学長）

都が事業を進めている英語村・東京グローバルゲートウェイを紹介。国内にいながらにして英語のみによる様々な活動を通して、使える英語力や異文化を体験させる。明海大学は足立区と英語教育連携協定を結び、足立区の児童生徒の英語基礎力の定着と向上、グローバル人材の育成を図る。

■「OECDと新しい学習指導要領―21世紀の学力」金森強氏

大学と小中高校の教育現場が学習指導要領に基づき、CAN－DOリストの形で学習到達目標の設定作業をしている。学修ポートフォリオを活用して形成的な評価をし自律的な学修者を育てることが必要。横須賀市の取り組みを紹介し、世界を意識しながら沖縄で行動できる人材を育てる英語教育を訴えた。

■実践発表「4技能統合型の授業実践例」鎌田洋子氏

自律した学修者が育つため4技能に疑問・意見・感情などの1技能を意識した指導を展開。アニメや映画、テレビCMなどあらゆる素材を使い、生徒の興味を引き付け生徒の全てのものを英語で表現させ、生徒同士が伝え合う場を授業の中心としている。

■名城政一郎氏・沖英会副会長

アジア諸国のグローバル化を図る視点として英語教育とシティズンシップを挙げる。英語のミスティクを恐れない、自分に自信をある生徒を育てている。